

音とことばのふしぎな世界 2019  
—プリキュア、ポケモンから日本語ラップまで—

2019年12月21日(土) 14:00 ~ 16:00

愛知大学名古屋校舎 講義棟8階 L803教室

講師：慶應義塾大学言語文化研究所准教授 川原繁人氏

若き音声学・音韻論学者で、多数の学術論文に加えて、『音とことばのふしぎな世界』(岩波書店)・『「あ」は「い」より大きい!?—音象徴で学ぶ音声学入門—』(ひつじ書房)などの書物を通し、音声学・音韻論を専攻する学生および一般の人向けにも学問の一端を分かりやすく説明することにも積極的な川原繁人先生をお招きし、音の研究の世界を披露していただくと同時に、ことばの研究の面白さを存分に語っていただいた。

フェルディナン・ド・ソシュールは、ことばが持つ特性の一つとして「恣意性」があると提案した。「恣意性」とは、簡単に言えば、言語は記号にしかすぎず、表すもの(=ことばによる記号)と表されるもの(=物体、概念など)の間には何ら必然的關係はないというもので、例えば日本語で「猫」と呼ぶ動物を必ず「猫」と呼ばなければならないわけではなく、その証拠に、この動物を英語では“cat”、ドイツ語は“Katze”、フランス語は“chat”と別の語で示す。これはゆるぎない言語の特質ではあるが、しかし「音」の面で見ると、音が持つ特性が、その物体や概念のイメージの形成に寄与しているというのが川原先生のご主張で、アニメのキャラクターであるプリキュアやポケットモンスター(ポケモン)、アイドル歌手(AKB48)、メイド喫茶や日本語ラップなど、身近な話題をもとに多数の例を出して、音が持つ特性や音が形成するイメージ、すなわち「音象徴」(おんしょうちょう)についてご説明くださった。

マジカル、ミラクル、ブラック、メロディー…。これはアニメ「プリキュア」のキャラクターの名前だが、すべて上下両方の唇を閉じて発音する「両唇音」が含まれている。両唇音は赤ん坊が早く身につける音であり、「かわいい」イメージを創り出す。かわいい女の子向けのアニメ「プリキュア」に両唇音が多いのも納得である。またAKB48のメンバーの愛称を見ると、「ぼるる」「まるる」…など共鳴音が多い。共鳴音は、女性らしい優しいイメージを作りやすいため、AKB48の愛称として共鳴音が選ばれる理由も見えてくる。このように、キャラクターや愛称のイメージも音の特徴から導き出されるのである。

しかし一見それに反するものがある。例えばメイド喫茶には、/s/, /t/, /k/ などツンツンした厳しいイメージを持つ阻害音が多く含まれる名前の女の子が一定数いる。川原先生は「女性らしさ」を追求するこの場所で、なぜこのような「男性らしさ・厳しさ・ツンツン」のイメージを出す阻害音の名前が支持されるのかに対して疑問を抱いた。メイド喫茶でのフィールドワークを通して得た結果は…、メイド喫茶ならではの「萌え」文化と「ツン」文化である。優しさを追求するのが「萌え」で、ツンデレの語に象徴されるように少し厳しさを出すのが「ツン」である。そう、ここでも音が出すイメージが、キャラクターの形成に寄与しているのである。



この他にも、日本語ラップの絶妙な韻の踏み方、またそれは英語ラップとどのように異なるか... など、川原先生はご講演の中で盛りだくさんの例を出していただき、音の世界に我々を導いてくださった。上で説明した共鳴音と障害音が出すイメージの違いには、音波の強さである音圧や、音の響き度合い、音の聞こえ度など様々な要素が絡んでいるのだが、今回は時間の制約もあり、これらの点について詳しい説明をしていただくことができなかったのが残念である。しかし、そこまで求めるのは酷とも言える。ぜひ興味を持った学生諸君は、上記の2冊、および川原先生の最新刊『ビジュアル音声学』（三省堂）で、そのあたりのことを調べてもらいたい。



「言語学者よ、外に出よう！」—これは、川原先生が講演の冒頭で言われた言葉である。まさに川原先生はこれを体現しているフィールドワーカーであり、音声学・音韻論の理論の妥当性を、ことばが使用される実際の現場から得たデータで明らかにしている。言語の統語現象（＝文法にまつわる現象）を机の上で分析している私にとっては、目から鱗が落ちるご発表であった。またとても楽しそうに研究をし（もちろん研究上ではうまく行かないご苦労も多々あるだろうが）、その研究の醍醐味を存分に語るができる川原先生をうらやましく思った。言語学の面白さ、ことばの研究の楽しさ・奥深さを再認識させてくれるご講演であった。

（文責：北尾 泰幸）

